

日本学術会議第72回総会報告

日本学術会議第72回総会は、4月26～28日の3日間、新緑に包まれた本会議講堂で開かれた。冒頭、会長から石田一良（第1部）、山田龍雄（第6部）の両地方区選出会員が各地方区に所属しなくなったため規則により退職し、かつ次点者がいないため欠員となったことおよび事務局職員の異動が報告され、ついでオブザーバーとして出席した琉球大学上原方成、沖縄大学安良城盛昭両教授の紹介があった。

〔諸報告〕 ついで日程に入り前総会以後の会長経過報告が行なわれた承された。そのうち特に「環境影響評価制度」についてその名に値する制度の実現を念願として政府に申入れを行なったことが述べられた。

つづいて運営審議会付置各小委員会の報告に移ったが第10期の活動のとりまとめ小委員会から報告に関連して提出された「転換期の科学・技術」と題する報告書作成の方針、内容案等は活発な論議の後大筋で了承された。なお同小委員会の名称は第2日に「科学・技術政策のあり方に関する報告書作成小委員会」と決定した。沖縄連絡小委員会からは沖縄県の学術体制に関し琉球大学医学部開設の内示等やや明るいきざしが見えてきた旨報告された。午後の常置、特別各委員会の報告では資源・エネルギー、学術情報・資料特別委員会から秋の総会に提出予定の勧告案の説明が行なわれた。

〔提案審議〕 2日目の冒頭、「生態学研究所」（仮称）の設置についての勧告が提案された。戦後、生態学は生物学の重要な1分野として急速な発展を遂げ、純粋に学問上の立場からも、また環境の保護・保全や生物資源の管理・利用の観点からも、ますます重要視されるに至っているが、現在我が国ではその基礎問題を扱う総合的な研究所は皆無である。そこで国立の共同利用研究所としての本研究の設置が計画された。本研究と他機関との関連、研究分野の範囲等について活発な意見が述べられたが、討議の末賛成多数で採択された。

ついで「リハビリテーションに関する教育・研究体制等について」の勧告が提案された。戦後30年の今日、心身の障害のため、人間として生きる権利の行使が妨げられている人々について、その「全人間的復権」を図ることを理念とするリハビリテーションの重要性が増大してきているが、その活動に従事する専門的教育・訓練を受

け、広く社会や人間に関する理解を基礎とした人間性豊かな職員の十分なる確保と、そのための資格制度の確立、教育・研究体制の整備は大変遅れている。本提案は、(1) リハビリテーション医学教育・研究の充実。(2) 理学療法士、作業療法士教育の充実。(3) 言語療法士、義肢装具士、医療福祉士（何れも仮称）等の資格制度の創設と教育について、政府が必要な措置を講ずるよう勧告しているものである。2、3のコメントが出された後、賛成多数で採択された。

つぎに「婦人研究者の地位の改善について」の要望が提案された。この提案は婦人研究者の地位の改善等のため差当たり、(1) 国による婦人研究者の実態調査の実施。(2) 科学研究分野への婦人の職業的参加。(3) 研究者の採用・昇進等における男女の機会均等。(4) 婦人研究者の母性保護上の措置等に関し、政府が積極的な施策を講じるよう強く要望している。これに対し、要望では弱い、勧告にすべきであるとの積極的な意見が活発に出されたが、1つのステップであるからとのことで原案どおり採択された。なお審議の際傍聴席には多数の婦人研究者の顔がみられた。

「日本学術会議の使命達成に必要な予算の早急な実現について」（要望）の提案は満場一致で採択された。これは本会議の予算、特に主要な職務である国際学術交流と審議経費の規模が極限にまで狭小化している現状分析をふまえて本会議にふさわしい予算編成のあり方と当面必要な最低限度の予算規模の早急な実現を要望したものである。このほか、「科学技術会議の第6号答申（「長期的展望にたった総合的科学技術政策の基本について」）が行なわれた際の措置について」等2件の申合わせが提案され採択された。

〔自由討議〕 2日目の午後、提案審議終了後、人間と科学特別委員会がまとめた「人間と科学」に関する提言（案）について自由討議が行なわれた。この提言（案）は人間と科学の問題を、(1) 人間の生命の尊重、(2) 科学と人間、(3) 科学技術と人間、(4) 国民の資質・能力の形成、(5) 科学者の責任という5つの原則からとらえたものであるが、人間と科学の未来等について活発な意見が交された。

第3日の「米国の新しい核政策とその我が国の原子力

研究開発への影響」についての自由討議ではこの際本会議として発言すべきであるという意見が強かった。

総会前日の午前中開催された連合部会では人間と科学特別委員会からの話題提供により「科学者憲章」(仮称)(第3次案)との関連での科学者の責任の問題および組

換 DNA にかかわる問題が活発に議論された。

なお、今総会の出席率は第1日から第3日まで、それぞれ89%, 86%, 79%であった。

(日本学術会議広報委員会)

沖縄管内気象研究会 宮古島地台で開催される

昭和51年度の気象研究会は、更新されて間もない白いドームの輝く管内随一のしょうやかな宮古島地台で、3月10日、11日の両日にわたり、沖縄気象台との共催で開催された。

今年から平素研究交流に乏しい地方官署の会員にできるだけ参加していただき、今後の調査・研究の意欲を高めていただくため、はじめて地方官署で行なわれた。

沖縄気象台長の挨拶にはじまり、次のように22の論文が発表された。論文は予報、レーダ関係のものが多く、このほかに地震、雲などバラエティーに富んだもので、実り多い会であった。

発表された論文

第一部(発表順)

1. 沖縄本島における山(がけ)崩れと先行雨量について 沖縄気象台 真喜屋実彦
2. 1976年7月29日の偏東風波動の解析 沖縄気象台 玉城 真通
3. 台風域内の風速の予想 宮古島地台 赤羽 俊朗
4. 宮古島における冬季の天候ベースの波数とパターンについて 宮古島地台 平岡 季康
5. 石垣島と宮古島の大雨について 宮古島地台 本村 隆俊
6. 700mb 湿数および鉛直流と石垣島の天気 石垣島地台 正木 謙
糸満 英典
7. 平良港における季節風時の沿岸波浪と風 宮古島地台 根間 俊明
8. 宮古島の強風に関する統計 宮古島地台 根間 俊明
9. 宮古島レーダによる平均エコー量分布について 宮古島地台 下地 朝勇
外レーダ現業員
10. 宮古島における線状エコーについて

宮古島地台 立津 元信
下地 隆義

11. 冬期、先島近海に発生する低気圧、波動のレーダエコーパターンについて 宮古島地台 下地 朝勇
12. 小エコーの移動から台風の中心を求める方法について 石垣島地台 山川 武夫
13. 石垣島における台風エコーのZ-R関係の測定 石垣島地台 石原 正仁
14. 那覇空港における春先から梅雨期の雲分布 那覇航空測候所 恩納 則光
15. 南西諸島域を通過する寒冷前線の雲構造について 那覇航空測候所 仲本 正隆
新垣 和夫
16. 気象庁のマグニチュードと沖縄3官署におけるマグニチュードの比較 宮古島地台 細野 耕司

第二部

17. 流れの可視化(Tornado-like Vortex) 琉大教養部 中村 功
18. 北太平洋西部海域の表面水温および気温の季節変化 琉大短大部 石島 英
19. 台風周辺場の客観解析法による外挿 琉大教養部 中村 功
石垣 雅和
島尻 勝
20. 1976年10月23日沖縄本島地方における大雨の解析 沖縄気象台 金城 博明
21. 1976年10月23日の竜巻について 沖縄気象台 上原 清
22. 台湾の見える諸条件の検討 与那国島測候所 伊志嶺安進